

大家「レーコック」氏ハ「ギヤボランジ」ヲ以テ偉効ヲ奏セリ又タ「リンガル」氏及ヒ「ダコスタ」氏ハ毒蚊元ヲ稱用セリ
 「トロシユ」氏ノ説ニ據レハ鱗草ハ綾餅ノカアリト雖モ治効ヲ奏セスト云フ
 毛爾華尼電氣ハ屢々効力ヲ現ハスヲアリ一極ヲ後頭下ノ頸部ニ措キ他ノ一極ヲ季肋下部ニ置クヘシ尋テ沃度加里ヲ内服セシム
 又タ「ピロカルビン」及ヒ毒蚊元ヲ試用スルモ可ナリ其外衣類ニ注意シテ常ニ温暖ナラシメ且時候ノ寒冷ヲ避ケテ温暖ノ地ニ轉セシムルヲ良トス

釋義

○ 恐水病 名原 HYDROPHOBIA.
 恐水病ハ發狂セシ獸類中殊ニ狂犬ノ唾液中ニ含有セル毒質ノ種接ニ因テ起ル所ノ一種ノ疾患ナリ而シテ其特徴トスヘキモノハ毒質ノ感染シタル部ニ於テ疼痛及ヒ梗強ヲ起シ反射機能亢盛シ嚙下ノ作用ヲ營マントスレハ喉頭ノ痙攣ヲ起シ尋テ液体ノモノヲ見ルモ忍テ痙攣ヲ發シ終ニ譫語及ヒ虚脱ニ因テ斃ル、モノナリ
 本症ハ又タ狂犬病ノ異名アリ

原因

恐水病ノ發生ニ於テ緊要ナル原因ハ畜犬家猫及ヒ猿猴ノ唾液中ニ含有セル觸接傳染ノ毒質ヲ以テ人躰ニ種殖スルニアリ
 本病ノ毒質ハ健態ノ皮膚ヨリ吸收スルコト能ハス必ラス創傷若シクハ剝脱面ヨリ侵入スルモノトス
 體質モ亦タ本症ノ發生ニ於テ必要ナルカ如シ何ントナレハ同一ノ狂犬ニ依テ咬傷ヲ被ムルモノ數人アルモ皆ナ悉ク恐水病ヲ發スルヲナキヲ以テナリ而シテ咬傷患者ニシテ恐水病ヲ發スルモノ、平均ハ殆ント半数以内ニアリ
 偶然咬傷ヲ被ムルモ毒質ノ侵淫ヲ免ヌカレ、コトアリ假令ヘハ衣服ノ外ヨリ咬傷セラレ、或ハ毒質ヲ含有スル所ノ唾液ハ衣類ニ深著スルヲ以テ創傷面ニ達スルヲ能ハサル

カ爲メニ恐水病ノ侵襲ヲ免ヌカハ、ト多キカ如シ又タ之レニ反シテ身体ノ露出セル部ニ創傷ヲ被ムリ又タハ皮膚ノ剝脱面ニ唾液ノ滲着ヲ致スルハ其發生ノ機最モ確實ナリ老幼男女ノ別ナク皆トク悉トク感受性ヲ有スト雖モ男子ニアリテハ特ニ咬傷ヲ被ムルコト多キヲ以テ發病ノ數モ亦タ多シトス
精神及ヒ身体ノ感動モ亦タ發生ヲ促カスモノナリ譬ヘハ恐懼、妄想、過度ノ勞役及精神ノ疲勞ニ依テ誘發セラレ、カ如シ

病理的解剖

屍体剖驗ニ於テ一定ノ變狀ヲ呈スルモノ尠ナシ今マ最モ普通ノモノヲ舉ケレハ死後強直明亮ニシテ皮下溢血ノ部位廣大ナリ而シテ腐敗ヲ起シ易ク血中ノ色素ヲ以テ尿管壁ヲ滲着シ血液ハ流動シテ紫黑色ヲ呈スヘシ
口峽ハ腫脹シテ赤色ヲ呈シ唾腺増大シ尿管及ヒ尿管支ニ充血ヲ起シ泡沫痰ヲ含ミ肺モ亦タ充血シ偶マ浮腫ヲ起スアリ其他腦モ多少溢血シ室内ニ滲出物ヲ生シ延髓ノ尿管増大シテ多量ノ血液ヲ含有ス
偶マ第七對、第八對及ヒ第九對神經ノ根基部ニ於テ組織ノ變狀假令ヘハ軟化ヲ起スカ如キモノアリ
肺胃神經、橫隔膜神經及ヒ交感神經モ亦タ多少充血ヲ起スコトアリ

徴候

潜伏期ハ一定セサルモノ、如シ大家「ギャクコード」氏ノ統計ヲ見ルニ患者總數二百十四人中潜伏期一月以内ニアルモノ六十人一月ヨリ三月ノ間ニアルモノ百四十三人三月ヨリ六月ノ間ニアルモノ三十人六月ヨリ一年ニ渉ルモノ十一人ナリ
「ガムジ」氏ノ説ニ據レハ大數ノ比例ヲ以テスレハ平均ノ潜伏期ハ二十八日乃至五十六日ノ間ニアリト云フ殊ニ依テ潜伏期ノ長短アルカ如シ故ニ幼稚ノ患者尤名ハ皆ト悉トク僅カニ二十三日乃至十五日ノ潜伏期ヲ有セリト云フ
又タ其反對ナル者年ノ一患者アリ殆ント二年間窄嶽ニアリテ恐水病ヲ發セリ而シテ咬傷ヲ被ムリタルハ殆ント七年以前ニアリシト云フ
潜伏期ニアリテハ創傷面又タハ全身ノ症狀ニ於テ毫モ疾患ノ現存ヲ微知スヘキモノアルコトナシ故ニ創傷面或ヒハ剝脱面頗フル輕微ニシテ癒合シ殆ント其症狀ヲ忘ル、ニ至リ既ニ潜伏期ヲ經過スルノ後患者咬傷セラレタルヲ想起シ再ヒ其癩痕ニ於テ不快ノ感覺ヲ生スルコトアリ
創傷面ノ癒合セサルモノニアリテハ創面暗青色トナリ劇痛ヲ發シ四肢ニ咬傷セラレ、
キハ患部ヨリ軀幹ニ向テ放射スルカ如キ疼痛ヲ感スヘシ
既ニ癩痕ヲ構成シタルモノニアリテハ其部ニ疼痛ヲ發シ赤色トナリ腫脹シ偶マ血漿

ヲ滲出スルコトアリ或ヒハ患肢ニ於テ厥冷及ヒ麻痺ヲ起シ突然其部ノ淋巴腺腫大シテ
 硬固ナル赤色ノ線ヲ現ハスコトアリ
 局處ノ症候ニ尋テ全身ノ變調ヲ求タシ患者自ツカラ生力抑壓シテ畏懼ノ狀ヲ呈シ又タ
 憤怒シ易ク殆ト鬱憂病ニ類スルヲ以テ本病ノ第一期ヲ指シテ鬱憂期ト稱スルモノアリ
 皮膚温煖トナリ脈搏疾數ニシテ彈力ヲ有シ食思欲乏及ヒ便秘ヲ將來スヘシ
 偶マ創傷面ニ於テ變狀ナク精神ニアリテモ心痛及恐怖ノ念ナク熱症ヲ以テ起ルアリ
 病初ノ徵候如何ヲ問ハス其時期短少ニシテ數時間若シクハ一二日ニ過キス爾後忽チニ
 シテ一種特異ノ反射的發作ヲ起シ呼吸徐長トナリ又タ疾數トナリ橫隔膜ノ抑壓ニ依テ
 上腹部ノ突隆ヲ起シ肩胛舉筋及ヒ不正四角筋ノ作用過度ナルカ爲メニ肩胛部ヲ隆起シ
 同時ニ心臓部ニ抑壓ノ感アリ又タ胸腔ノ前壁ニ於テ緊張ヲ覺工頸筋ニ極強ヲ起シ喉頭
 ノ窄狹ヲ覺工頭顱ノ廻轉難在ナラス
 既ニ此機ニ達スルハ特異ノ感覺ニ依テ判然微知スルヲ得ヘシ譬ヘハ飲液ヲ嚥下セン
 トスレハ忽チ咽頭諸筋ノ痙攣ヲ發作スルモノナリ然リ而シテ患者常ニ煩渴ニ耐工雖キ
 ヲ以テ飲料ヲ取テ口角ニ遊ツクルハ忽チ異想ヲ現ハシ微カニ恐駭シタルカ如ク眼球
 突出シ顔面ニ皺變ヲ現ハシ四肢震戦スルヲ甚タシク殊ニ液体ヲ含メル器物ヲ把握セシ

ムルキニ於テ著ルシク勉メテ吸吸セントスルモ咽喉ニ下ラスシテ忽チ窒息狀ノ痙攣ヲ
 發作シテ悉トク吐逆シ患者虛衰シテ終ニ病床ニ倒ル
 暫時ニシテ液体ヲ目撃シ或ヒハ鏡面ニ照射スル所ノ水流ヲ視ルモ之レヲ嚥下スルヲ
 想像スルヤ否ヤ咽頭ノ痙攣ヲ發作スルニ至ルヘシ而シテ常ニ咽喉ノ窄狹シタルカ如キ
 感覺アリ口内乾燥シテ口狹ヨリ粘痰ヲ咯出セント欲シテ粗厲ナル咳嗽ヲ發シ殆ント狂
 犬ノ呼吹スルカ如シ故ニ此症徵ニ因テ本病タルヲ斷定スヘシ
 神識安靜ナラスシテ常ニ心痛アルモノ、如ク面貌慘憺トシテ眼球ニ光輝ヲ放チ屢々廻
 轉シ且鏡舌トナリ精神迷誤シ凡ソ二三分時ヲ過クル毎ニ咽喉ニ擁塞ヲ起シタルカ如キ
 感覺アリテ之レヲ咯出センカ爲メニ咳嗽ヲ發スヘシ
 液体ヲシテ目ニ觸レシムルハ恐駭シテ離敵ニ襲ハレタルカ如キモ常ニ煩渴シテ飲料
 ヲ欲スルコト頻リナリ又タ症ニヨリテハ反對ノ症狀ヲ呈シ精神爽明ナルモノヲ見ルコ
 トアリト雖ヒ素ヨリ例外ニ屬スヘシ予カ實驗セシ患者ノ如キハ全然癡狂ニ陥ラサルモ
 精神ノ迷誤ヲ求タサルモノナシ
 偶マ精神及ヒ辨識ノ作用ヲ失セサルモ常ニ憂苦ノ狀ヲ呈シ自己ノ親族及ヒ朋友ノ身上
 ヲ苦慮シテ止マサルモノヲ見ルコトアリ

予カ實驗セシ一患者ニアリテハ發作時ニ際シ精神依然トシテ辨識ヲ失セス傍人ヲ傷害
セシトテ恐レテ遠サケンコヲ望メリ而ル後一呼吸ヲ營ムヤ否ヤ牙關緊急ニ類スル所ノ
發作ヲ將來セリ

病機増進スルハ呼吸促進シ暫時ニシテ鎮靜シ隨意筋ノ梗強ヲ起シ呼吸稍ヤ困難トナ
リ皮膚赤色トナリ又タハ蒼身症ヲ呈シ心臓ノ作用疾數微弱トナルヘシ斯ノ如キ症候ハ
數秒時間ニ過キスト雖モ其時期及ヒ強弱共ニ一様ナラス然レモ末期ニ近ツクニ從テ感
覺ノ減少ヲ見ルヘシ

偶マ男子ニアリテハ陰莖ノ勃起(即チ強直)ヲ起シ婦人ニアリテハ花風病ヲ發スルコトア
リ又タ排尿困難ヲ起スコトナカラス或ヒハ小便淋漓ヲ來タスコトアリ

經過時期及轉歸

恐水病ハ一種ノ急性病ニシテ第一期ハ二三日ヲ超ユルコトナラ

少ナキハ二三時間ニ過キサルモノアリト雖モ平均ニ二十四時間ナリ

第二期ハ所謂恐水期ニシテ大抵一日間ナルモ偶マ二三日ニ渉ルコトアリ或ヒハ數時間ニ
過キサルコトアリ

轉歸ハ虚脱ニ因テ斃ル、モノト窒息ニ依テ死スルモノト全身搐擣ヲ發スルモノトノ三
種アリ

虚脱ニ陥ルモノハ下脛垂下シテ口角ヨリ唾液ヲ流出シ脈搏細數ニシテ赤ノ如ク全身
冷汗ヲ發シ瞳孔散大、直視及ヒ嘔嘔ヲ發シ暫時ニシテ搐擣狀ノ震戰ヲ起シ虚脱ニ陥ル
リテ斃ル

窒息ニ陥ルモノハ發作間突然窒息シテ死ヲ致スモノナリ

第三ノモノハ發作間全身ノ搐擣ヲ發シテ死スルモノナリ

本症ノ時期ハ大抵三日間ナリ

豫后ハ極メテ不良ナリ真性ノ恐水病ニシテ恢復シタルモノナラバ其例証ヲ見ス唯タ近今
「クラーラ」(箭毒)ニ因テ治セシモノニ名ノ報告ヲ得タリ又タ佛國ノ大家「パスチユ

ル」氏ノ新治法ハ後章ニ詳説スヘシ

診斷

恐水病ト牙關緊急トハ頗フル類似ムル所ノ症狀ヲ呈スルモノニシテ二症

共モニ脊髓ノ反射機能亢盛シ末梢神經ノ刺激ニ因テ痙攣ヲ起スヘシ然レモ恐水病ニア
リテハ發病前必ラス狂犬ノ咬傷ヲ被ムリタル履歷ヲ有スヘク牙關緊急ニアリテハ必ラ
ス創傷ニ因テ起ルヘシ又タ恐水病ニアリテハ口峽ノ狭窄ヲ覺エ其時期短少ニシテ危險
ナリト雖モ牙關緊急ニ於テハ咬牙ヲ發シ多クハ治愈ニ趣クモノナリ

治則

狂犬若シクハ同一ノ疾患ヲ發シタル獸類ノ咬傷ヲ被ムルハ創傷面ニ燻

鐵ヲ用ヒ或ヒハ硝酸銀ヲ以テ腐蝕法ヲ施コスヘシ
 醫士「ヨイヤット」氏ハ硝酸銀ノ効驗ヲ説キ他ノ強劇ナル腐蝕藥ヲ用フルノ要ナキヲ論
 セリ加之ノミナラス他ノ學士輩モ亦タ硝酸銀ノ効驗ヲ稱用スルモノ多シト雖氏實際ニ
 於テ精査スルキハ皆ナ想像説タルヲ免ヌカレス
 又數多ノ特效藥ト稱スルモノアリト雖氏一モ確實ナルモノヲ見ヌ畢竟咬傷患者ハ皆ナ
 恐水病ヲ發スルモノニアラサルヲ以テ如何ノ治法ヲ施コスモ之レヲ發セサルヲ見レハ
 効力アリト見做スモノ多キニ因ルモノ、如シ
 吾人ハ最モ信認スル所ノ藥用ハ箭毒(アララ)ナリニ名ノ治驗報告中一ハ「ニウヨル
 ク」府ニシテ一ハ伊太利國ヨリ達シタルモノナリ而シテ箭毒ヲ皮下注射藥トシテ使用
 セシモノナリ其他苦痛ヲ緩解スルニハ格魯刺兒、格囉吩「ゲルセミウム」及ヒ「ニコチ
 ン」ナリ

方今一大問題トシテ世人カ論議スル所ノ新説ハ特ニ章ヲ分チテ詳論スヘシ

○ 恐水病 治法之新説

譯者曰此篇ハ佛國ノ博士「エム、バスチユール」氏カ發明セシ恐水病ノ新治法ニシテ千
 八百八十四年(明治十七年)ニ於テ創メテ歐米各國ノ醫事新聞ニ載セテヨリ今日ニ至ル
 マテ醫學社會ノ一大問題トナリタルモノニシテ同氏ノ試驗成績ト他ノ學士輩ノ議論ト
 ヲ蒐輯シタルモノナリ今マ讀者ノ閱覽ニ便ナラシメンカ爲メニ先ツ發明者カ當初此術
 ニ注目セシ事實ヲ舉ケ逐次其成績及ヒ評説ニ及ハントス

今ヲ去ルコト八年前即チ千八百八十年(明治十三年)十二月ニ於テ佛國ノ博士「バスチ
 ユール」氏ハ狂一病ノ試驗ニ着手シタルヲ同國ノ醫士「ランネロンダ」氏ニ報道セリ
 其記事ヲ略記スレハ前月中一小兒アリ偶マ狂犬ノ爲メニ面部ニ咬傷ヲ被ムリ直チニ大
 家「トロシユール」氏ノ病院ニ送リタルカ爾後二日ニシテ窒息ニ因テ斃レタリ屍体ヲ檢ス
 ルニ喉頭ニ於テ泡沫狀ノ物質ヲ充溢セリ死後二三時間ヲ經テ「バスチユール」氏ハ此粘
 液性ノ泡沫ヲ取り少量ノ水ヲ和シテ二頭ノ家兔ニ種接セシカニ頭共ニ二日ヲ過キテ死
 斃セリ是レ即チ「バスチユール」氏カ狂水病ノ試驗ニ於テ六年間ノ苦辛ヲ嘗ムルノ始メ
 ナリ否ナ世界無上ノ榮譽ヲ得ルノ楷梯ニ達シタルモノナリ
 種接法ヲ施コスニ當テハ動物ノ前頭部ニ圓錐ヲ以テ骨体ヲ除キ腦膜内ニ毒質一滴ヲ注

入セハ忽チニシテ恐水病ヲ發現スヘシ同氏ハ家兔ノ屍体ヨリ毒質ヲ取り蓄犬ニ種接セシカ即日ニシテ恐水病ヲ發セシノミナラス本症ハ元ト腦病ニシテ脊髓ニ波及シ終ニ神經ノ全系ニ達スルノ理ヲ發見セリ故ニ狂犬ノ唾液中ニ存スル所ノ毒質ハ唾液腺ニ於テ終ハル所ノ神經末梢ヨリ來ルヲ判決セリ

同氏ハ爾後數多ノ家畜、蓄犬、家兔及ヒ猿猴ヲ蓄エ逐次恐水病ノ毒質ヲ種接シテ其症狀ヲ檢査シ其成績ヲ同國ノ大學校ニ報告セリ

又タ夫ノ咬傷ヲ被ムルモ一週日以内ニ種接法ヲ施コスキハ恐水病ヲ發スルノ憂ナキヲ發明セシハ實ニ一大恩惠ト云フヘシ

種接療法ニ使用スル所ノ毒質ハ強劇ニ過クルキハ害アルヲ以テ恰モ痘苗ヲ牛体ニ種接スルカ如ク猿猴若シクハ家兔ニ種接シ第一回ノ種接ヨリ第二回ニ達スルキハ稍々微弱トナリ第二回ニ比スレハ第三回ニ種接スルモノハ一層微弱トナリ第五六回ニ至レハ益々微弱トナリ終ニ種接後三十日餘ヲ經サレハ發生セサルニ至ルヲ想定セリ

抑々博士「パスチユール」氏ノ醫學ニ精神ヲ傾クルヲ親許ナルハ世界中多ク其比ヲ見サル所ナリ故ニ同氏ノ醫學社會ニ鴻益ヲ與ヒタルモノ亦タ渺ナシトセス即チ醋性酸酵ノ原理、蠶病ノ原因及ヒ豫防法其他癰腫ノ豫防法ノ如キハ皆同氏ノ發明ニ係ハルモ

ノナリ殊ニ今回ノ恐水病治法ノ如キハ全ク氏カ忍耐不拔ノ精神ニ依テ其光輝ヲ發シタルモノニシテ世人カ種痘ノ術ヲ發明セシ英人「ゼンチル」氏ノ効績ニ比スルモ敢テ咎ムヘキニアラサルナリ

千八百八十一年(明治十四年)五月三十日ニ於テ「パスチュール」氏ハ助手「チヤンパーランド」「ローキス」及ヒ「ゲルリール」ノ諸氏ト共ニ連署シテ佛國ノ大學校ニ報告セシ所ノ要領ヲ擧クレハ既往ノ試験ニ於テハ間マ成績ノ不明ナルモノアルモ今日ニ至リ判然認定シタル所ノモノハ脊髓珠ニ延髓ノ部ニ於テ一種ノ恐水病毒ヲ含有セリ而シテ其毒質ノ種接法ヲ行フニ當テハ圓錐術ヲ以テ硬腦膜下ニ注入スルハ表皮下ニ施スニ比スレハ更ニ確實ナリトス又タ此法ヲ施スハ感深ノ期モ亦タ遅延スルヲナク三週日ヲ費ヤサルヘシト云フ爾來更ニ數多ノ試験ヲ重テ翌年十二月再ヒ報告ヲ公布シ左ノ條件ヲ明記セリ

第一條 恐水病ノ諸症ハ沈黙ナルモ狂暴ナルモ皆同一ノ病毒ヨリ起ルモノトス

第二條 恐水病ノ症候ハ一定スルヲナク各個皆ナ其狀ヲ異ニス是レ恐ラクハ毒質ノ占居スヘキ部位即チ腦脊髓神經系各部ノ造構ニ於テ天賦ノ特異性ヲ有スルニヨルヘシ

第三條 恐水病者ノ唾液中ニハ種々ノ小動物ト共ニ毒質ヲ檢出スルヲ得ヘシ之ヲ種接

スレハ三種ノ死因ヲ現ハスヘシ第一ハ恐水病ヲ發シテ斃レ第二ハ膿血症ニ因テ死シ第三ハ唾液中ニ含有セル小動物ノ作用ニ因テ死スルモノ是レナリ

第四條 恐水病ニ因テ斃レタルモノハ人畜共ニ延髓ニ於テ毒質ノ最モ強劇ナルヲ認ムヘシ

第五條 恐水病毒ハ特リ延髓ニ存スルノミナラス腦ノ全部若シクハ一部ニ於テモ亦タ檢出スルヲ得ヘシ其他脊髓ノ一局處若シクハ全系ニ於テモ亦タ占居スヘシ

毒質ノ機能ハ腐敗セサル間ハ其力ヲ失ハサルモノニシテ攝氏十二度ノ溫度ニアリテハ三週日間腐敗セサルヘシ

第六條 恐水病ノ發生ヲ確實ナラシムルニハ圓鋸術ヲ以テ硬腦膜下ニ注入シ腦ノ表面ニ種接スルヲ良トス又タ靜脈管内ニ注射スルモ可ナリ而シテ癲狂ノ狀ヲ呈スルハ五六日ノ後ニアリ

第七條 靜脈管内ノ注射ニ因テ發シタル恐水病ハ咬傷若クハ圓鋸術ニテ注入シタルモノニ比スレハ其症候ノ殊異ナルヲ勘ナカラス咬傷又ハ圓鋸術ニ依テ發シタルモノハ多ク沈黙性ノ癲狂狀ニシテ麻痺ヲ起シ易ク噪鳴又タハ咆哮スルヲナク涕淚ヲ流カヌヲ見ル之レニ反シテ靜脈管内ニ注射スルモノハ當初脊髓ヲ侵カシ尋テ他ノ部ニ蔓延スルモノ

第八條 畜犬ノ靜脈管ニ注射シテ癩狂ヲ發スルモ死ニ至ラサルモノハ其唾液又ハ血液ヲ取り種接法ヲ施コスモ豫防ノ効ヲ奏スルコトナシ故ニ種接ノ後更ニ純粹ニシテ有力ナル毒質ヲ以テ種接スルハ忽テ恐水病ヲ發生スヘシ

第九條 恐水病ハ初起ニアリテハ間々頓挫スルヲアリト雖モ既ニ劇症ニ陥リタルモノハ決シテ治癒ニ趣クナシ又々偶々初起ノ輕症ヲ現ハシ爾後久シキヲ經テ劇症ヲ呈シ直チニ斃ル、モノヲ見ルヲアリ

第十條 千八百八十一年ノ試驗中畜犬ノ種接法ニ於テ三頭ニ種接セシカ其中二頭ハ暫時ニシテ恐水病ヲ發シテ斃レタレモ一頭ハ初起ノ輕症ヲ發スルノ後回復セリ更ニ此犬ニ於テ翌年中ニ回種接法ヲ施シタレモ毫モ發病ノ徵ヲ呈セザリシ

第十一條 前條ニ記シタル一頭ノ外尚ホ三頭ノ畜犬ハ強劇ナル毒質ヲ種接スルモ毫モ發病ノ徵ヲ呈セス是レ恐ラクハ從前輕症ノ恐水病ニ罹リタルモノニシテ既ニ免厄質トナリタルモノカ否サレハ稟生免厄ノ質ヲ賦有セルモノナラン

上記ノ諸條ハ畜犬、家兔及ヒ猿猴、羊豚ノ類ニ於テ殆ント二百回以上ノ試驗成績ニ因テ認定シタルモノナリ故ニ「パスチユール」氏ハ人間ニ於テモ亦々種接法ニ依テ恐水病ヲ豫防スルヲ得ヘシトノ意見ヲ呈セリ

病毒ハ神經中樞、腺及ヒ末梢器ノ諸神經中ニ存在スルヲ抽出セリ
 種接法ヲ施スニ當テハ所用ノ毒質ノ多寡ニ依テ發病ノ症候ヲ異ニスヘシ故ニ少量ヲ種
 接スレハ暴發性ノ癩癩ヲ起シ大量ヲ種接スレハ沈黙性ノ癩癩ヲ現ハスヘシ
 毒質ヲ稀薄トナシ之レヲ恐水病ノ豫防法ニ適用スルノ發明ハ畢竟其量ノ多少ニ依テ發
 病ノ症候ヲ異ニスルノ成績ヨリ推測シタルモノナリ
 恐水病ハ一種ノ毒質ニ因テ起ル所ノ疾患ナリ今マ此毒質ノ作用ヲシテ強弱ノ度ヲ異ニ
 スルヲ得ルヤ否ヤト云ハ、必ラス其差ヲ生スルヲ見ルヘシ即チ動物ノ種族ヲ殊ニスレ
 ハ其毒質モ亦タ同一ナラサルモノトス而シテ同一族ノ動物ニ於テ甲ヨリ乙ニ種接スレ
 ハ漸次其作用ヲ變シ終ニ一定ノ度ニ達スヘシ
 猿猴ノ族ニアリテハ種接スル毎ニ其毒質ノ作用ヲ減シ終ニ犬族ノ皮下ニ注射スルモ發
 病ノ徵候ヲ呈セサルニ至ル又タ之レニ反シテ家兔ニアリテハ種接ノ度數ヲ増加スル毎
 ニ毒質ノ勢力ヲ増加シ終ニ七日間ノ潜伏期ニ達スルヲ得ヘシ
 爰ニ於テ「パスチユール」氏ハ犬族ヲシテ恐水病ノ免危質トナスヲ得ヘキノ原則ヲ論
 シ之レヲ佛國ノ教育大臣ニ請フテ検査委員ヲ命シテ其成績ヲ世ニ公ニセンヲ建言セ
 リ同大臣ハ直ニ其議ヲ容レ「ベクラー」ド「ビーベルト」「ボーレイ」「チソラランド」「ウ井

ルレミン」及ヒ「ウルパン」ノ六氏ヲ委員ニ命セリ
 千八百八十四年(明治十七年)八月六日同試験委員ノ報告ノ摘要左ノ如シ
 我試験委員ニ於テ恐水病試験ニ使用セシ畜犬十九頭中六頭ハ狂犬ノ咬傷ヲ被ムリタル
 モノニシテ三頭ハ死亡セリ毒質ヲ靜脈管内ニ注入セシモノ八頭ニシテ三頭ハ死亡セリ
 毒質ヲ圓錐術ヲ以テ注入セシモノ五頭ニシテ皆ナ悉ク死斃セリ
 「パスチユール」氏發明ノ種接療法ヲ施セシ畜犬二十三頭ハ皆ナ健全ニシテ一モ恐水症
 狀ヲ發現セス其内一頭ハ種接後第七日ニ於テ下瀾ヲ發シテ斃レタレモ恐水病ノ症
 候ナシ其他三頭ノ家兔及ヒ一頭ノ家豚ニ種接法ヲ施セシカ皆ナ健全ナリ
 千八百八十五年(明治十八年)十月二十五日ニ於テ「パスチユール」氏カ始メテ人躰ニ種
 接法ヲ施行シタル成績ヲ大學校ニ報告セリ爾來數多ノ試験ヲ重テ終ニ本年(明治十九
 年)八月ニ至ルマテ同氏カ施行セシ成績表ヲ見ルニ患者ノ總數千六百五十六名ニシテ
 死亡シタルモノ僅カニ十五名ナリ其國名及ヒ人員左ノ如シ

| | | | |
|----------|-------|----|-----|
| 佛國人 | 千〇〇九人 | 死亡 | 三人 |
| 普國人 | 百八十二人 | 同 | 十一人 |
| 「ローマニヤ」人 | 二十人 | 同 | 一人 |

| | | | |
|-----------|---------|-------|-----|
| 英國人 | 五十九人 | 同 | ナシ |
| 澳斯太利人 | 十七人 | 同 | ナシ |
| 「アルジール」人 | 七十四人 | 同 | ナシ |
| 米國人 | 十八人 | 同 | ナシ |
| 「ブラジル」國人 | 二人 | 同 | ナシ |
| 「ベルギー」國人 | 四十四人 | 同 | ナシ |
| 西班牙國人 | 五十八人 | 同 | ナシ |
| 希臘國人 | 七人 | 同 | ナシ |
| 荷蘭國人 | 八人 | 同 | ナシ |
| 「ホンガリー」國人 | 二十五人 | 同 | ナシ |
| 以太利國人 | 百五人 | 同 | ナシ |
| 葡萄牙國人 | 二十人 | 同 | ナシ |
| 土爾格國人 | 二人 | 同 | ナシ |
| 瑞西國人 | 二人 | 同 | ナシ |
| 總計 | 千六百五十六人 | 死亡 總計 | 十五人 |

讀者上記ノ表ヲ一讀スルニハ種接療法ノ裨益ヲ知ルニ因シムナカレベシ是故ニ數多ノ反對説ヲ唱フルモノ尠ナカラスト雖モ其成績ニ依テ思考スルニハ亦タ其我意ヲ募ル一能ハサルヘシ又タ本症ノ特異毒ニ起因スルヲ知ルモ患者ノ稟生免厄質ナルモノ多キカ爲メニ發病セスト云ヒ或ヒハ潜伏期ノ一定セサルモノ多キヲ以テ「パスチユール」氏ノ治法ヲ施シタルモノト雖モ他日發病セサルヲ保スル一能ハスト云フモノアルモ吾人ハ斷然其駁説ノ否ナルヲ辨スヘシ何ントナレハ今日ニ至ルマテ他ノ治法ヲ施コシタル患者ノ治驗ハ各國共ニ殆ント半數以上ノ死者ヲ現ハス一吾人カ共ニ詳知スル所ナリ又タ潜伏期ノ一定セサルヲ以テ攻撃セントスルモノアルモ此成績兼ハ既ニ一年以上ノ日子ヲ經過シタルモノナレハ既ニ發病ノ恐レナキヲ知ルヘシ又タ論者アリ恐水病ハ特異ノ毒質ニ起因スルモノニアラス必ラス精神ノ感動ニ因テ來ルモノナリト云フモノアリ素ヨリ其説ノ不當ナルハ識者ヲ俟テ後ニ知ラサル所ナリト雖モ假ニ其説アリトスルモ「パスチユール」氏ノ發明ニ依テ千百餘名ノ患者ヲシテ精神ノ感動ヨリ米ルヘキ死亡ニ陥井ルノ不幸ヲ免レシメタリト云フヲ得ヘシ況ンヤ數多ノ試驗ニ依テ毒質ノ現存ヲ認定シタルノ尠ナカラサルニ於テオヤ

内科新論第七冊大尾

明治十七年十一月十四日版權免許
明治二十年二月二十三日出版御屬

正價金貳圓

出版人 巖手縣士族 鳥谷政人

日本橋區西川岸町
内科新論出版事務所內

出版所 第九十國立銀行支店內 内科新論出版事務所

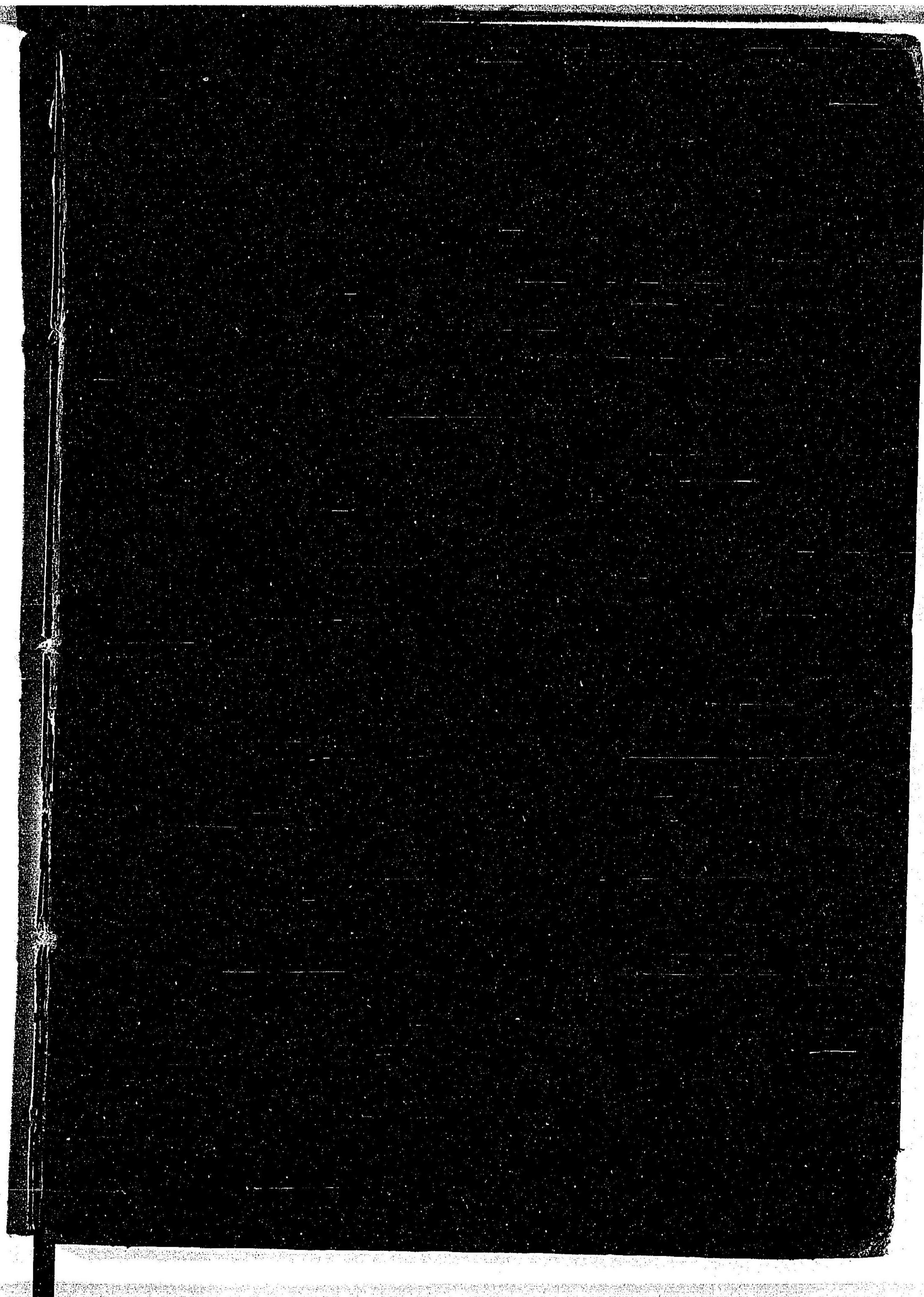
日本橋區西川岸町

印刷所 内科新論活版所 英舍

日本橋區本材木町

35

176



35
176

M